

## 素顔の東欧

## 社団法人ロシアNIS貿易会・ロシアNIS経済研究所 次長 服部倫卓

## 東高西低の新興国経済

## IMFの世界経済見通し

国際通貨基金(IMF)は10月1日、『世界経済見通し』の2009年10月版を発表しました。この資料で、2009年の世界各国の成長率予想のデータを眺めていると、一目瞭然の現象があります。それは、「東高西低」と言いましょうか、総じてアジア勢ほど数字が良く(日本は例外ですが)、ヨーロッパ諸国が劣勢だという点です。

いわゆるBRICsでは、中国が8.5%成長で、全182か国中、堂々の3位です。インドも5.4%で13位と健闘しています。このアジアの両大国に対し、ロシアは-7.5%で、171位、つまり下から12番目に甘んじています。

旧ソ連諸国にフォーカスしても、ウズベキスタン(7.0%)、トルクメニスタン(4.0%)など、中央アジア諸国の成長率予想は概して良好です。一方、ヨーロッパ系の国々は、すでに述べたロシアに加え、ウクライナ(-14.0%)、アルメニア(-15.6%)、モルドバ(-9.0%)といった国がきわめて大きな下落となっています。極め付けは、旧ソ連のいわゆるバルト3国、すなわちエストニア(-14.0%)、ラトビア(-18.0%)、リトアニア(-18.5%)で、リトアニアは不名誉な最下位になってしまいました。

## ロシアは中小規模の新興国とは違う

現時点で落ち込みが激しいバルト3国や一連の中東欧諸国は、数年前に欧州連合(EU)に加わりました。これらの国々は、EUおよびユーロ圏への加入を急ぎ、金融の自由化や外資への開放を大胆に進めたと言われていました。しかし自由化が行き過ぎて消費や不動産のバブルが起きていたところに、2008年の世界経済・金融危機が起こり、これらの小国から外資が急激に引き揚げ、一気に苦境に立たされたということでしょう。

ロシアのマイナス成長にも、金融市場からの外資の逃避という要因があったことは間違いありません。しかし、ロシアはバルト3国や中東欧諸国などと比べて、はるかに懐の深い経済を擁していますし、無防備に外資の影響にさらされてはいません。金融セクターから多少外資が引き揚げただけで、経済が破綻してしまうような国ではないのです。実のところ、ロシア経済のマイナス幅がなぜか大きくも大きいのかということに関しては、原因が明確になっておらず、専門家も首をかしげているのです。

ロシア経済が現時点で不調である大きな原因として、国際的な資源・コモディティ価格の下落、とりわけ油価の低迷があるのは、疑いないところです。しかし、中東など他の産油国の2009年の経済見通しを見ても、必ずしも大きなマイナスになっていません。ロシアの-7.5%という数字は、いくつかの要因が複雑に重なり合った結果と考えるほかなさそうです。

## IMFの描くシナリオ

ただ、IMFの世界経済見通しでは、ロシアが最悪期を脱しつつあるとの分析が示されています。IMFによれば、直近の指標は、経済の縮小が鈍化し始め、資本収支や為替レートへの負荷も緩和されていることを示しているとのこと。財政出動、コモディティ価格の改善、欧米市場の回復に支えられ、ロシアは2010年に1.5%程度の回復を遂げるようになるというのが、IMFの描くシナリオです。

- ・ 当資料中の第三者のコメントは著者個人の見解であり、当社の運用方針、投資判断とは何ら関係がありません。また内容の正確性・完全性について当社が責任を負うものではありません。

## ファンドお申込情報

■年内の「こはく」お申込休止日: 12月24日(木)、12月25日(金)

\*お申込休止日は、フランクフルト証券取引所またはフランクフルトの銀行の休業日です。